

大洲城跡(石垣 A-1 箇所)

I. 調査の概要

1. 調査名 石垣保存修理工事に伴う埋蔵文化財調査(石垣 A-1 箇所)
2. 所在地 大洲城跡二の丸奥御殿(大洲市大洲)
3. 調査期間 平成29年11月～平成30年2月
4. 調査面積 約90 m²
5. 調査体制

調査主体: 大洲市教育委員会

調査指導: 大洲城跡石垣保存修復委員会(委員長: 下條信行 愛媛大学名誉教授)

6. 調査の目的

石垣保存修理工事における解体工事と並行して石垣背面等の埋蔵文化財調査を実施しました。これは、孕みなどの石垣が損傷した原因を解明するとともに、石垣の構造、構築過程、構築時期など、石垣積み直し工事に必要な資料を得ることを目的として調査を実施しました。

今回の調査成果のポイント!

- ①3時期の石垣が検出され、江戸前期の曲輪の変遷が明らかに
- ②絵図との整合性が確認され、絵図の信憑性が高まった

II. 調査成果について

今回の調査では、江戸時代の3時期の石垣が確認されたことが大きな成果といえます。

石垣①は、現石垣の解体中に裏側で発見されたもので、現石垣の中ほどくらいの高さに位置し、大きく破壊されてはいますが、約2.5mの範囲に数石の石材が残されていました。この石垣を境として南北で地層が大きく異なっており、南側ではこの石垣の裏込である栗石層が見られるのに対し、北側ではそれを確認することができませんでした。このことから、発見された石垣付近が石垣の隅にあたる部分と考えられ、ここを隅石として東と南に延びる石垣だったと想定されます。また、今回発見されたのは石垣の根石(石垣の最下段の石)の部分で、これより下は土羽(土の法面)であることから、石垣自体の高さは1m前後の低いものだったと想定されます。

石垣①は、既存の絵図には描かれていない未知の石垣で、今回発見された中では最古の石垣と考えられます。



写真1 検出された石垣①(北西方向から)

手前が解体中の石垣で、その裏側で発見された。ほとんどが破壊されており、数石のみが残されていた。



写真2 検出された石垣①(正面から)

検出されたのは根石部分で、これより下は土羽となる。左端の石は、傾いているが本来は隅石だったと思われる。

石垣②は、今回の解体工事前には石垣③と一連の石垣と判断していたのですが、根石を検出するために石垣前面を掘り下げたところ、地下2mまで続いていることが分かり、石垣③とは別の独立した石垣であることが明らかになりました。検出された部分で長さが南北10.9m、高さは5.2mを測ります。この石垣を築いた際の盛土によって石垣①が埋められている状況から、石垣①の後に石垣②が築かれたことが明らかになりました。恐らくは、石垣①の乗る土羽の部分を、高さ5m以上の高石垣に改造したのではないかと考えられます。さらに、石垣①よりも前面(北側で約6m、西側で約1.5m)に張り出して築くことで、曲輪(二の丸奥御殿)の拡張も合わせて行われたのではないかと考えられます。

また、石垣南端部分はその立ち上がり角度からみて、本来は北端のような隅石が存在しており、石垣の隅にあたる部分があったと想定されます。これは、正保年間(1644～1648)の『伊予国大洲城之図』(図2)や、江戸前期頃とされる『大洲御城地割図』(図3)に石垣の隅(折れ)が描かれていることから絵図とも合致しています。このことから、石垣②は少なくとも正保年間までに築かれた石垣である可能性が高いと考えられます。

石垣③は、石垣②に継ぎ足された石垣で、石垣②南端に見られた隅(折れ)を無くして直線的なラインに改修されたものです。ただ、根石部分が石垣②の根石からは約1.5mも高い位置にあり、根石が盛土上に置かれている状況から、石垣③は曲輪(二の丸西帯曲輪)全体が大きく埋め立てられて地上げされた後に築かれたものと考えられます。

元禄5(1692)年の『御城中御屋形並地割図』(図4)や『大洲城絵図』(図5)では、既に角(折れ)は無くなっており、現在のような直線的なラインで描かれていることから、石垣③は元禄5年までに築かれた可能性が高いと考えられます。

これらのことから各石垣の構築年代については、石垣③は正保年間(1644～1648)～元禄5(1692)の間に、石垣②は正保年間までの間に、石垣①はそれ以前に、それぞれ築かれた石垣と考えることができます。いずれの石垣も江戸前期までに築かれた石垣であり、江戸前期における石垣や曲輪の変遷を考える上で重要な発見といえます。さらに、絵図との整合性もみられることから、絵図の精度の高さが窺えるほか、これまで年代不詳だった絵図の年代を考える上でも有効な発見になったといえます。



図2 『伊予国大洲城之図』(国立公文書館蔵)



図3 『大洲御城地割図』(加藤家蔵)



図4 『御城中御屋形並地割図』(加藤家蔵)

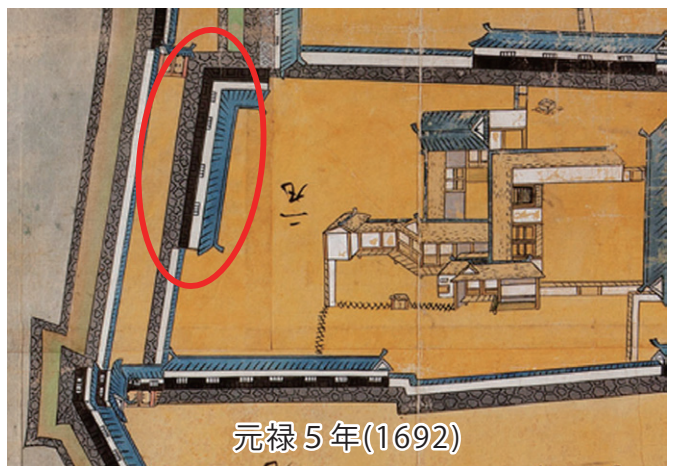


図5 『大洲城絵図』(加藤家蔵)

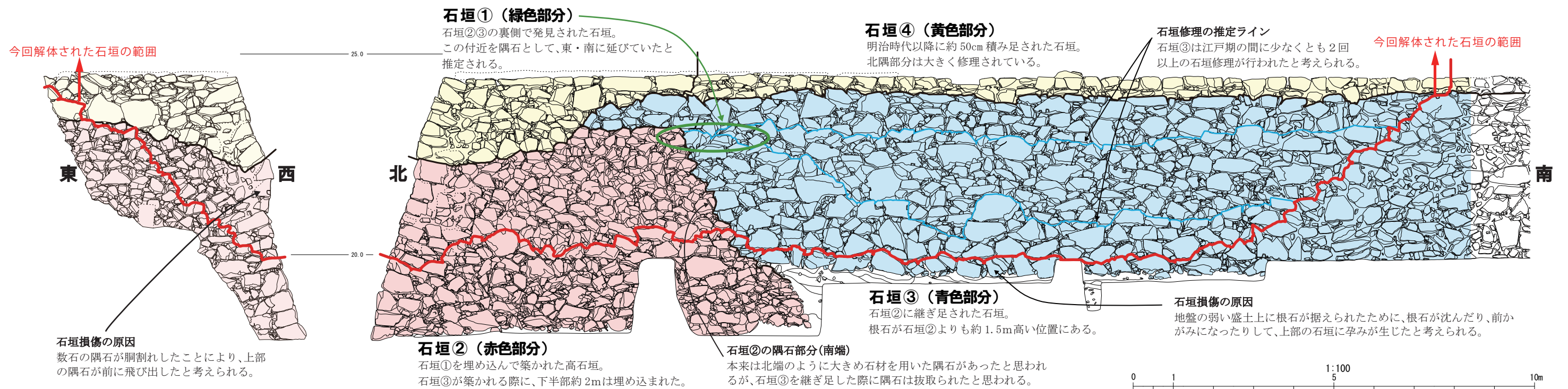


図1 石垣立面図

Ⅲ. 奥御殿における試掘調査成果

奥御殿に関する試掘調査は、平成 27 年 3 月から断続的に進めており、平成 28 年度には大洲城の近世城郭化に伴う鍛冶炉を複数基検出し、大きな成果を挙げることができました。今回は、奥御殿(藩主の私邸)のものに関係する遺構を検出でき、大洲藩主・加藤氏らがどのような生活を送っていたのかを知るための手がかりを掴むことができました。

(1) 3 トレンチ ― 貯水遺構の検出(写真 4)

これまでの調査で石積みの遺構を検出していましたが、この遺構の用途は不明のままでした。しかし、継続して調査を進めた結果、この遺構が防火などのための貯水遺構であることが新たに判明しました。石積みの南北は約 1 間(約 1.97m)であり、検出時の状況から少なくとも石が 2 段以上積まれていたと考えられます。18 世紀中葉～後葉に描かれたと思われる『御城中屋敷指図』には、南北 1 間、東西 1.5 間の貯水施設と思われる描写があり、調査成果と指図との整合性を確認することができました。

(2) 2, 4, 5 トレンチ ― 2 段階にわたる奥御殿遺構の検出(写真 3)

これまでに円礫の石敷遺構を検出していましたが、これは建物に付設される犬走の三和土(いぬばしり ^{た た き} 叩き土に石灰や砂利を加えて塗り、叩き締めたもの)基礎である可能性のあることが判明しました。また、この三和土基礎を検出した層からは、鍛冶炉 1 基が出土しています。

さらに、これらの層の下から、一面を小石で敷詰めたような遺構を検出しました。この小石も三和土の基礎であり、一面を三和土で固める箇所には、調理に関連する土間や流しなどが考えられます。しかし、『指図』によれば、通常は板敷きであるはずの台所にも三和土が採用されていることとなります(図 6)。さらに詳しく奥御殿の構造や調理場の復元をおこなううえで、大きな課題といえます。



写真 3 2 段階にわたる三和土の遺構(2, 4 トレンチ東から)



写真 4 貯水遺構の様子(3 トレンチ北東から)

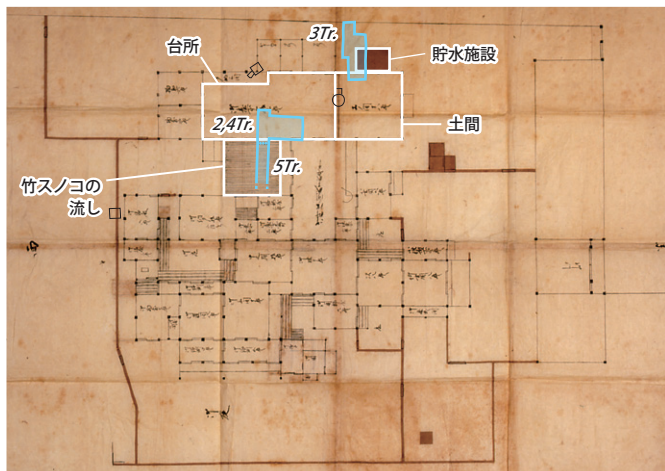


図 6 『御城中屋敷指図』とトレンチ設定箇所

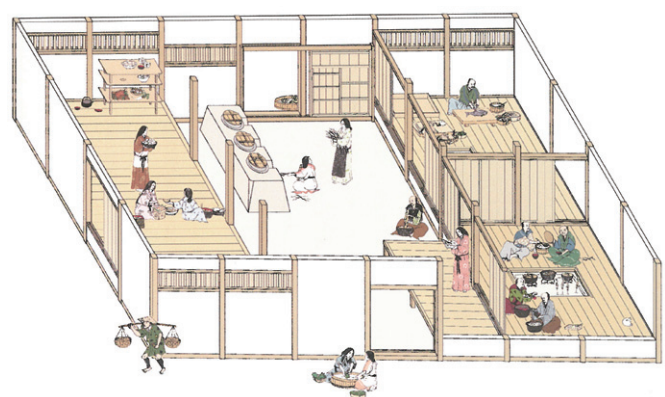


図 7 土間・台所の復元図(三浦 2005 を一部改変)

吉川元春館(広島県)の発掘調査成果をもとに復元された土間・台所の様子。当時、調理はすべて座っておこなわれており、まな板も板敷きへ直に置かれた(右上)。